

崔 吉城

## 一・セクシー

我々は日常的にセクシー、美人・不美人、美男・美女、ハンサム、イケメン、チャームिंग、流行、ファッション、デザインなどのことを多く話す。女性に対しては、綺麗、美しい、かわいい、セクシーなどのことばもよく使う。二〇一九年九月二日、日文研・共同研究会（井上班）で朝鮮の春画に関して発表した時、メインのキーワードを「セクシー」とした。セクシー (Sexy) とは性的魅力の形容詞、性と美が混合したニュアンスの言葉、一般的に英語圏では規制語でもある。偶然であるうが国連で日本のある大臣が「セクシー」という表現を発言して話題になっていた。

「秋田美人」などのことばもよく耳にするが、それは民衆の美意識であり、文化人類学の研究対象になり得る。しかしその研究は少ない。人類学者マリノフスキー（一八八四—一九四二）は熱帯雨林地域でほぼ裸で生活する種族「未開人」の生活を観察、調査し、美と性に注目した。それに関し

ては『未開人の性生活』(Bronislaw Malinowski, *The Sexual Life of Savages in North-Western Melanesia*, 1929) に生々しく書いており、「なにが美や魅力とされるのか」を追及したことがわかる。

マリノフスキーのフィールドワークによると、パプアニューギニアのトロブリアンド島民の間では美男とは均衡のとれた身体、ほっそりした、まっすぐで背の高い体格を指し、さらに心身ともに健康、精力、生命力と力強さ、なめらかなつやつやした光沢のある肌の美しい人をいう。彼らは露出部分が多く、隠す部分が少ないが、決して羞恥心がないわけではない。男性は下腹部から腰椎部、そして陰部を被うことにきわめて注意深く、ベルトで整えている。寢床以外の所で男性が陰部のおおいをはずすことはほとんどない。女性はスカートを身に着ける。家族や親類友達という時や仕事の時には、トップススカートを脱いで、アンダースカートだけを身に着けている。

多くの「未開」民族の間では化粧や衣装は肉体を隠すものと理解されていることを、マリノフスキーは指摘している。トロブリアンド島民によると「ヨーロッパ人は良い容貌とはいえない」と言う。ヨーロッパ人はドレスやファッショ的な

どで人為的に姿を変えているので、彼らの肉体美は裸体生活を  
している民族には分かりにくいのである。うすい唇やわし  
鼻などもメラネシア人にとっては決して美しいものではない  
だろう。原住民の美意識は自民族中心であり、他民族より優  
れていると島民達からは考えられていたのである。この文脈  
から美の基準が如何に相対的であるかが分かる。

現代の韓国人は整形美容などが一般化して、美意識が高い  
といわれるが、身体的に美しい人が多くとは限らない。サハ  
リンに住んでいる韓国人はロシアのスラブ系民族の肉体美に  
劣等感を強く持っている。私はかつてインタビュウのなか  
で、ロシアの女性は若い時は肉体美「セクシー」であり、韓  
国人は強く望んでよく結婚するが年を重ねると後悔するだろ  
うと韓国人の老婦人たちが話しているのをよく耳にした。グロ  
バル化した現代の美は、民族ごとに異なるもの、相対的なもの  
ではなく、絶対的な基準に規定されているということである。

## 二、露出

韓国の朝鮮王朝の春画から肌の露出状況を見ると、朝鮮王  
朝時代には春画においてさえも完全にヌードにはなっていな  
かった。画のモデルは主に盛装した貴婦人と妓女であり(図

1、2)、女性の全裸の絵は  
ほぼない。図3では提灯、  
火鉢、オマルなどが描かれ  
ているオンドル部屋の男性  
(兩班・白いドルマギ)は  
裸であるが、女性はスカ  
ートを身に着けており、キ  
セルをくわえている。キセル

は貴婦人や妓生の象徴で  
ある。図4は庶民(帽子、  
青服)のようである。他の  
春画においても女性が完  
全にヌードになっている  
のは少ない。それはヌード  
が当時タブーであったか  
らであろう。春画において  
さえ女性は衣装や化粧に  
よる美とファッションが  
強調されており、完全な  
ヌードにはならず、肉体美



図1 妓生



図2 妓生



図4 春画

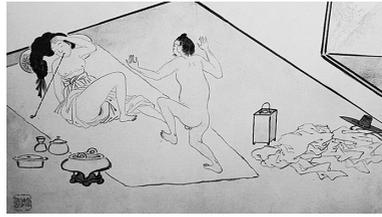


図3 春画

はそれほど描かれていない。「春画」は性的な刺激を主な目的としたポルノのジャンルに当たるが、朝鮮の春画では自然風物や調度、家具などと調和した風俗画のように描かれている。一八世紀半ば金弘道と申潤福による春画二〇数点がある。申潤福の《端午風情》の川辺の洗濯場で体を洗う妓生の乳房とお尻が露出している姿、女性の胸と足、赤ん坊を背負った女性の乳房を露出している様子が描かれている。それを男性が岩陰から覗いている。正面から鑑賞するのではなく、隠れながら覗くのは金弘道と申潤福の図にも共通する（図5、6）。暗室の中で映画を鑑賞するのと酷似している。

今、世界的に女性の風貌が変化している中、韓国では女性の肌の

露出が激しくなり、肉体美が浮き彫りになっている。衣装で被われた肉体が解放され露出度が高いファッションになっている。この傾向はそれほど古い歴史ではない。一昔前までは露出は厳しく制約され、ミニスカート禁止、スカートの丈が問題になり、時々警察の取り締まりもあった。現在では女性が脚線美を見せ、大腿まで露出するようになった。露出度が極度に高くなる傾向を目にして、熱帯

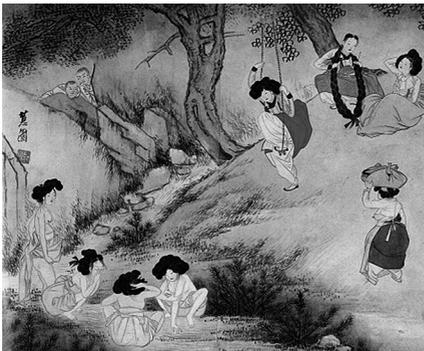


図6 申潤福作



図5 金弘道作

地域の「未開人」化していくのではないだろうか、そして究極的にはヌード化へ至るのではないだろうか、と不安にもなる。

朝鮮の春画においては、老人の男性のヌードが多いのが特徴である。回春、不老長生、春画の購入者（需要）との関連があるのだろうかという解釈もある。肌の色が女性より濃いのは女性の肌が白いことを強調しているのだろうか。猥褻ポルノ的な点を避けており、性へのタブーに配慮したためなのだろうか。儒教的貞操観の影響から性は当時の道徳、社会的規範などに反するものであり女性がヌードになることはタブーだったのである。しかし、老人の男性のヌードならば、とくに問題視されなかったのだろうか。

周知のように、日本では同時期にリアルなヌード美人画が多数ある。二〇〇五年二月一日から三日までフランス・パリ日本文化会館で法政大学主催の国際シンポジウム（「ヨーロッパと日本との空間と時間の知覚―比較研究」『日本学と何か―ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究』法政大学、二〇〇七）でキブルツ氏が喜多川歌麿（一七五三?～一八〇六）の風呂桶に入ろうとする美人画（図7）について発表した。

稀な例として男性と女性の標本一対を並べて画いた『人物

正写惣本』（図8）に注目し、裸体は四肢の全てから皮膚に至るまで同じ正確さをもって描いており、客体を知覚し、表現したもので西洋的な技術を用いていると語った。

### 三、覗き

朝鮮の春画（図9）では真正面から女性の体を鑑賞するのではなく、「覗く」構図が取られた（図5、6、10）。伝統的な婚礼式後の初夜を親族や近所の者たちが障子の穴から覗く民俗がある。

男性が岩の影から扇で顔を隠したまま覗いて見ている構図もある（図5）。トルマギという外套を着て、黒笠のカツを被った人は両班の身分と思われる。両班の覗きの場面を以て「両班の偽善を批判した」作意があったのではないかとも解説される（洪善杓「朝鮮王朝後期風俗図の社会性と芸術性」『朝鮮時代春画』図画署、一九九六・梁鎬年「韓国絵画の近代化と女性の表現」九州産業大学大学院、二〇一四）。

他方、庶民はそのまま見ている（図6）。小川で服をたくしあげて下肢を露出して洗濯をしている女性たちが覗かれている。女性たちの座り方、洗濯している姿がセクシーに見えるようである。

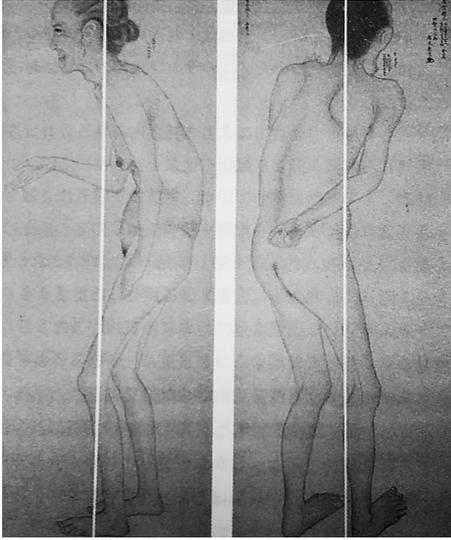


図8 『人物正写惣本』



図7 美人画

#### 四・化粧

化粧やドレスなどのファッション、衣装によって肉体美は隠れてしまうのだろうか。トロブリアンド島民にとって最も美的な部分は耳たぶであり、男女とも耳たぶに孔をあけて、耳輪をしている。また首も飾る。ハイビスカスの花や葉を髪にさして飾る。ネックレスをする。櫛で髪を整え、ココ椰子の油をぬるなどして、美しく見えるようにしている。爪の手入れをし、化粧をする。

私は幼少時、韓国の農村で育ったのだが、当時は女性が化



図9 春画鑑賞



図10 覗き

粧をすると芸者、売春婦だと言われていた。口紅を塗るとネズミを殺して食べた猫に似ていると擲揄された。化粧は芸者のものであり一般の女性は避けるべきものだった（崔吉城「韓国女性と化粧」『韓国文化』二一九号、韓国文化院、一九九八）。その韓国が今では化粧や美容整形手術などが盛んに行われ、外見主義の「整形大国」ともいわれている。

伝統的に韓国の女性は姿勢や立ち振る舞いで社会的文化的「女性」性を表現していた。いわばファッション的に「女らしく」着飾ることが求められ、肉体美は抑制されていたのである。

## 五、性と美

実は性と美という二つの要素はしばしば混合している。公的に女性の美を語る時は性を抜きにして芸術性を強調するが、実際には化粧と衣装によってセックスアピールしていることが多い。

ただし美は性と必ずしも結びつくものではない。「醜い」女性でも性交渉の相手はいる。芸術的な美しさが性的魅力に繋がるとは限らない。マリノフスキーは美女、不美女の写真をそれぞれ提示しながら、性別による住民の反応を聞いた。

「かがやく眼」「やさしい眼」「晴れやかな眼」は性的欲望の窓口になる。主に眼と口（唇）が性的魅力のポイントであるとマリノフスキーは言う。

朝鮮の妓生はどうだろうか。美、性、恋愛、結婚にも繋がることが多い。日本の芸者は性と美が繋がらない事例であると主張する日本人が多いが、それは本当だろうか。芸者は美しい芸を売る女性であり、性を売るのはないという。朝鮮にも妓生は性的欲望の対象ではないと主張する人は多い。春香という芸者が一人の男性のために貞操を貫こうとして死刑も恐れないという「春香伝」という物語がある。妓生の貞操を強調する名作である。

実のところ妓生には性的なアピールがあるが、日本の芸者のようなものであると名目をつけて日本人は妓生を買った。戦後にも続いた妓生観光がその一つである。

（東亜大学教授／

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員）